

汽笛は時空を越える

大根列車

廣江安彦 著

まねがき

戦前、名古屋の一地方である大府町を舞台に、大府町の特産である「大根」と、その副産物である切干大根や沢庵漬にまつわる大根列車の実話を題材に、戦前・戦中・戦後の大根農家の夫婦の物語である。配役は大府で大根を作る「信三」68歳と妻の「トミ」、その他周辺の者たちである。

既に「大根列車」としてラジオドラマや劇場で上演され、好評を博している作品でもある。戦後70年余が経過して、戦争を知っている世代が次第に少なくなろうとしている。大上段に戦争と平和を語るのではなく、ただひたすらに一生懸命に生きてきた庶民を描き、その背景にあった戦争の恐ろしさ忌まわしさ、大切な肉親や友人、縁者を失う悲しみを感じ取って、戦争を知らない世代へ語り継ぐことが出来ればと思います、その作品のストーリーを纏めたものである。

汽笛の響き

妻の富は真夜中に夢を見ていた。遠くの方から力強い汽笛が聞こえてくるのであった。確かにあれは石炭で艘る蒸気機関車の汽笛の響きに間違いないのだ。20年以上も前に、太平洋戦争で南方のジャングルの戦地に徴用されたきり帰らぬ一人息子の「太(ふとし)」

が、大根の初採り（最初の収穫）の日に間に合うように列車で帰って来たに違いないと、トミは寢床から跳ね起きたのであった。

夫の信三は、その夢の話聞いて半信半疑であったが、今の鉄道は殆ど電化されて蒸気機関車の汽笛の音は姿を消してしまっていたが、

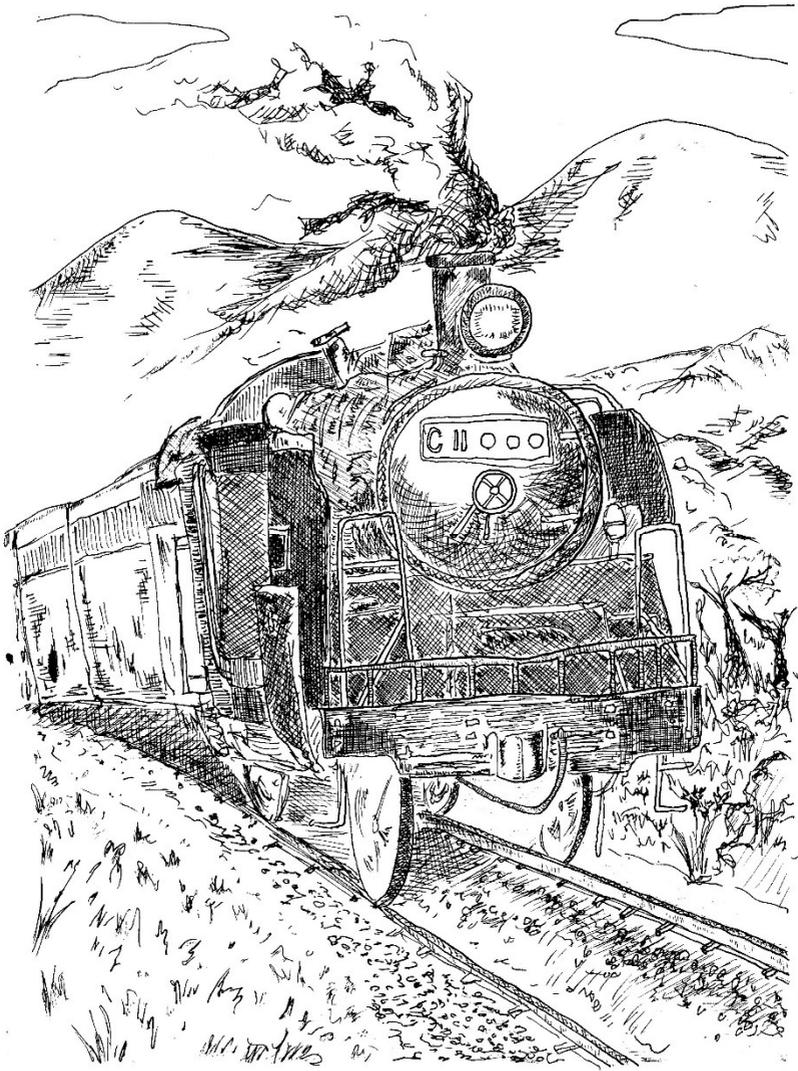
「まあいいや、夢の中でもいいから太に会えれば」と、夫婦は寝巻きの上に襦袢（どてら）を着て懐中電灯を持って近くの大府駅まで歩いて出掛けたのであった。夫婦は、真夜中の星空を見上げながら、一人息子が生まれた1921（大正10）年の時を思い出して、語り始めたのであった。

当時は、第一次世界大戦が終了し、世界的な大不況が続いて盛んに各企業では労働争議が行われていた時勢のさなかで、大根作り一本に精を出す大根農家の信三とトミの間に待望の一粒種が生まれ、大根のように太く逞しくなるよう「太（ふとし）」と名付けたのであった。その太は、4〜5歳の頃から大根畑に出掛けては、自分の身丈もある大根を見様見まねで引き抜く動作を始めていた。「お父ちゃんのような日本一の大根を作るのだ」と、夫婦を喜ばせるようになっていた。

回想

1. 戦前

昔から尾張地方の名物は大根で、細くて長いのは守口大根、そして太くて白いのは宮



重（みやしげ）大根であった。大府には「大根」と書いて「おおね」と呼ぶ地域があるくらい宮重大根の大根畑が広がっていた。夫婦は、畑でとれた生大根を切干大根にしたり、沢庵漬にしたり、福神漬にしたりしてよく働いていた。

1922（大正11）年には、長草に大府初の沢庵加工場が開設された。同13年には長草木ノ山地区に大根漬同業組合が結成されるなどして、生業から地場産業へと徐々に販路を拡大していった。

1931（昭和6）年に満州事変勃発し、翌年には満州国が建国され大勢の開拓日本人や軍隊への大根の需要が高まった。一粒種の息子の「太」は夫婦が上の学校まで進学するよう説得するが、これを拒んで高等小学校を卒業後大根作りの跡継ぎとして畑で精を出していた。切干大根の出荷が多くなり、お手伝いとして遠い縁者にあたる「よう子」という名の素直でかわいい娘を雇うようになった。

2. 戦中

当時の大府駅はホームが狭くて不便なため、大根農家の人たち自らも人足に出て、12車両連結の大根列車を走らせるために、大府駅に大根専用のプラットホームの増設やモッコを担いで線路の延伸の土方作業もした。

1940（昭和15）年2月には、大府大根は関西の卸売仲買人などと取引され、延べ250車両が大阪方面へ出荷され、最初の大根列車が走るようになった。

太は時々、よう子にいつか日本や世界の隅々まで大根を送る自分専用の「大根列車」を走らせたいと夢を語るのであった。

太は徴兵検査を受けて、甲種合格となり兵役義務で入隊していた。除隊寸前の1941（昭和16）年12月に大東亜戦争（太平洋戦争）が勃発し、更に兵役に徴用され戦地へ赴いてしまった。大府からは出征兵士の食料になる切干大根、沢庵漬を積んだ「大根列車」が毎日のように出荷されていた。信三とトミの夫婦は戦地の息子にも届くようにと祈って必死に大根作りに精を出したのであった。

大府音頭には、次のような最盛期の大根列車を懐かしく詠んだ一節がある。

畑の赤土 落とさず取らず 葉付大根が 今日も大根が

七貨車十貨車 アーソレソレ 西へネ西へ東へ トコセ汽車で嫁く

そうしたなか戦局は次第に悪化を辿り、大本營の華々しい戦果放送をよそに、南方戦線の戦局は転進という名の敗退や玉砕を続けていた。戦争末期になると、軍部の命令により大根畑は甘藷（さつまいも）畑へ作付け転換させられたが、夫婦は細々と大根作りを続けていた。

1945（昭和20）年の終戦間近になって、突然、白木の箱が夫婦の元に戻ってきた。それは「太」の戦死を意味していた。空っぽの白木の箱の中には「昭和20年7月24日、南太平洋方面で戦死」と書かれた戦死の公報の紙片のみであった。妻のトミは、

「こんなからっぽの箱が太のわけはない！」

「戦争なんかには殺されてたまるか！」と、畑に出て絶叫し、泣き叫ぶのであった。白木の箱は、納戸の奥に仕舞い込まれてしまった。

3. 戦後

終戦となり、戦地の復員兵を乗せた列車が、あの大根列車を送った大府駅のホームに次々と到着してきた。その度に夫婦は「太」はいないか、誰か知っている人は居ないかと尋ねまわるのであった。

ある日のこと、よう子に縁談がもちあがるが一向に結婚しようとしないう娘を心配して、よう子の母親が「太」と結婚の約束をしていたのではないかと尋ねて来た。夫婦は、二人は兄弟みたいなもので、そんなことはないときっぱりと否定した。折角の良縁だから話を進めるようにと言って母親を帰すのであった。

その日の夜、よう子が来て思いがけないことを告白するのであった。

戦争末期の頃、よう子は半田市にあった中島飛行機半田製作所に勤労働員として働いていた。中島飛行機工場では徴用工員と一緒に全国から学徒動員されてきた多くの勤労働生も働いていて、「天山」や「彩雲」という軍用機の組立に励んでいた。よう子は勤労働生の女学生と一緒に寄宿舎の女子寮から工場へ通っていた。

1945（昭和20）年7月24日に、突然B29の大編隊が飛来して大規模な半田

空襲が行われた。よう子が空襲警報で待機していた女子寮は、焼夷弾攻撃を受けて炎上し、寮長の命令で近くの防空壕へ退避することになった。

防空壕へ駆け込むよう子の耳元に突然、「そこに行くな！」という声が聞こえてきた。その声は確かに、あの「太」の声に間違いなかった。よう子は一瞬どのように行動したらよいのかためらってその場で立ちすくんでいたが、逆方向に逃げることにした。

その十数秒後に、よう子の後ろで物凄い爆発音がして、防空壕が爆弾の直撃を受けて防空壕内で先に避難していた多くの女子寮の女学生が犠牲となったのであった。よう子は「太」さんの声に助けられたと思った。よう子は「ああ！」と思わず声を上げた。

7月24日は「太」さんの戦死の公報の命日でもあった。「太」さんがあの世から私に声を掛けて救ってくれたのに違いないと思った。

よう子にとっては、命の恩人である「太」さんのお陰で生き長らえて、私だけが幸せになつては申し訳ないと、胸の奥に収めていたのであった。

信三は「よう子」に「太」のことは忘れて、今度会うときは花嫁姿を見せてくれと、そして幸せな生活を築いてくれと、太はそれを願っていると説得するのであった。

よう子が帰った後、妻のトミは畑に駆けていき、大根をめちやめちやに引っこ抜きながら絶叫するのであった。

「骨ひとつ、髪の毛一本なく、そんなわけの分からない死に方していいですか！」



それから暫く日時が経過して、夫婦はいつものように大根畑で精を出していた。多くの同業者はハウス栽培へ転換していたが、夫婦はかたくなに大根を作り続けていた。「わしらが生きている限り、大根を作っている限り、太の夢が生きているのだ」と。大根畑にはいつものように信三の音痴の歌声が響いていた。十八番（おほこ）である「ピンキーとキラーズ」のヒット曲「恋の季節」であった。

「この音痴の歌声が大根の生育に合っているのだよ！」と、言って夫婦は大笑いをした。

大根列車の出現

ここで話を序文「汽笛の響き」に戻すとする。

信三とトミの夫婦は過去の出来事をあれこれと思い巡らしながら大府駅に到着したのであった。無人の改札口を通り過ぎホームに出てみたが、こんな時刻だから当然のごとく駅員や人影は全く無かった。

真夜中に股引とラクダのシャツに襦袢（どてら）を着た夫婦がプラットホームの上で立っている異様な姿を他人が見たら、きつと寝ぼけてうろついている老人が二人いると思うに違いないと、夫婦は笑い出した。

「何も無かったようだね」と、夫婦はそろそろ帰ろうと言い出した。

すると突然、一筋の光が差したと思ったら、闇夜のトンネルを潜り抜けて出てきたよ

うに、12両の「大根列車」を連結した蒸気機関車がもくもくと煙をたなびかせ水蒸気を勢いよく吐き、あの夢の中で聞いた力強い汽笛の音を響かせながら、夫婦の前に近づいてきたのであった。まるで夫婦にとつては、話で聞いた銀河鉄道を見ているような光景でもあった。

その先頭列車には、身を乗り出すように息子の「太」が笑いながら、手を振りながら目の前を通り過ぎていくのを、信三とトミの夫婦は確かに見ていた。

「太は笑って手を振っていたね！　夢みたいだね！　太に会えてよかったね！」と、明日からまた大根作りが楽しみだと言いながら、満足した二人の影法師が、大府駅から今きた道を戻っていくのであった。

参考資料

- 「CD 大根列車〜汽笛は時空を越えて〜」 神谷芳弘企画制作
「BD 彩光：大府ロマンス街道」 神谷芳弘企画制作
「大根列車」 東海ラジオ放送
「舞台作品 大根列車」 ひと組 麻創けい子作・演出
「幻の大府飛行場と三菱四式重爆撃機・飛龍」 大府学研究会編
「大府市誌」 大府市誌編さん刊行委員会

ホームページ

フリー百科事典「ウィキペディア」

協力

資料 神谷恵美子

挿絵 水野尊之

